

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21-4 オーデンビル

3F / Siege : Oden Building 21-4

Higashi Marunouchi Tsu JAPON

N° 44 avril 1998 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

「日本におけるフランス年」開幕

メイン事業『自由の女神』移築と「フランスまつり」

昨年の「フランスにおける日本年」に続く「日本におけるフランス年」が、いよいよ4月全国各地で開幕されます。そのうちいわゆる目玉事業で、近々おこなわれるものを紹介します。

I. 『自由の女神』像の移築 (1998年4月下旬～1999年2月中旬)

1889年以来、パリのセーヌ河の中州シーニュ（白鳥）島に設置されていた『自由の女神』像が東京の臨海副都心に移築されます。自由の女神といえばニューヨークのシンボルのようになっていますが、これは1876年アメリカ建国百周年を祝してフランス政府が彫刻家バルトルディの手による大ブロンズ像を贈ったもの。その返礼としてパリの米人たちが大革命百年の際、少し小型の同じ像をパリに建てました。仏・米の友好のシンボルであると同時に、世界共通の「自由」のシンボルでもあります。

II. フランスまつり フランス農業と地方物産見本市

会場 東京ビッグサイト

期間 4月29日～5月5日

例年パリで開催される全国農業・地方物産見本市を東京で再現しようという前代未聞のイベント。『フランスの食卓』などをテーマに、「暖かい雰囲気の中で、これまであまり知られていないフランスの地方の姿を見てもらえるだろう」と主催者。30万人の参加を見込んでいるそうです。

どうなる？ 鴨川の〈Pont des Arts〉

当初「フランス年」の目玉事業の一つとして、京都市の鴨川に先斗町と祇園を結ぶ形でパリのボンデザールを模した歩道橋を建設するという計画が発表されましたが、「セーヌの橋はパリで美しくても京都にはふさわしくない」などと地元民の反対がおこり、その後も全国規模で多数の文化人、芸能人らもこの計画に反対を表明するに至っています；茂山千之丞（狂言）、中村歌右衛門（歌舞伎）、近藤正臣、佐藤慶、富司純子（俳優）、大岡信（詩人）、加藤周一（評論家）などの各氏。またフランスの有力紙〈ル・モンド〉も「京都の荒廃にフランスが片棒をかつぐことは残念」などと論陣をはりました。ことの是非は別としても、このプロジェが日仏関係に無用の大きな波紋を投げかけたことは確かなようです。

三重県企業にフランスから研修生

四日市・近鉄百貨店にリヨンの学生二人

フランスのリヨン大学第二大学院・高等専門研究課程では例年日本の企業に学生を派遣し、日本語の習得とあわせて実際の業務研修をおこなっていますが、今回初めて三重県でも四日市・近鉄百貨店がその受入れを決め、4月から二人の女子学生が売場で研修に励んでいます。Sophie DELUDET（ソフィ・ドゥリュデさん）とSabine KOURI（サビーヌ・クリさん）。二人とも1973年生まれ、これまでリヨン大学のほか英・米各国などでも学業や研修を積んできた優秀な学生さん



ソフィー

サビーヌ

です。昨年秋の本会メンバーのリヨン訪問の際は、同市郊外の史跡ペルージュ見学のバスツアーにも同行するなど、すでに三重日仏協会とは顔なじみになっています。

東京での日本語特訓を終え、来県早々の二人にアンケートを試みました。

1. どうして日本に来たの？ その印象は？

Sophie

リセ卒業後、アメリカとイギリスに住んでいたが、アジア特に日本への関心が深まった。その後日本の経済を勉強して、いよいよ来たくなった。日本の印象はとてもよく、多分日本で仕事を探すことになるでしょう。

Sabine

6年前からリヨン大学で日本の文化、経済、日本語を学んだことから、実際に来てみたかった。これは私の夢でした。東京に着いて感じたことは人が多いこと、そして日本の学生があまり勉強しないこと。四日市で自転車に乗ったら道が狭く、スピードを出した車が多くて怖かった。

2. 将来への希望は？

Sophie

面白くて熱中できる仕事をみつきたい。

Sabine

国際的な仕事のできる会社で、熱情を燃やせるような職場が見つければいいが。

3. 趣味や食べ物の嗜好は？

Sophie

趣味は旅行、読書（手あたりしだい）、音楽、コンピュータ（インターネット）、買い物。いちばん好きな日本の食べ物は、天ぷら、そば、たこ、いか。でも生の魚はだめ。コーヒーもアルコールもOK。

Sabine

趣味は、歌を歌う（とくに黒人霊歌はプロ級とか）、音楽を聴く、ギターを弾く、写真を撮る、天文学、旅行。

日本の料理は大好きです。天ぷら、すし、おにぎり、焼き芋、味噌汁など。でもたこはきれい！
コーヒー、アルコールも全然だめ。

5/10(日) 四日市で〈日仏茶会〉

三重日仏協会のなかで茶道に造詣のふかいメンバーが中心となり、四日市が運営する同市鶴の森公園内の茶室『洒翠庵』にフランス人のお客を招じて茶会を催します。お客はリヨンから研修のため来日中の学生ソフィとサビーヌ、津市在住のシャルル夫妻ら約10人の予定。

リヨン土産ばなしⅡ

セルヴェル・ド・カニユ Cervelle de Canut

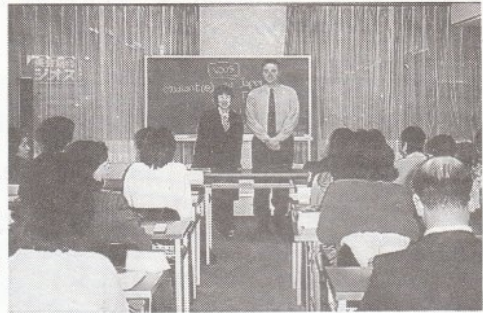
リヨンに来たからには、世界的に有名なレストラン〈レオン・ド・リヨン〉はムリとしても、その姉妹店で庶民的な〈ビストロ・ド・リヨン〉ぐらいなら……と一同、店の前のカルトを検分すると、何とか手頃な値段のメニューがある。が、そのなかの一皿に〈Cervelle do Canut〉とあった。「セルヴェルって何?」「脳みそのことや」「わーイヤ!」「私はゼッタイ食べる」と大騒ぎ。店に入り何人かはそのメニューを注文したものの、何の脳みそかがわからない。Canutなど持参の辞書にも載っていないのだ。牛? 羊? 中国ではサルのを食うらしいが……結局運ばれてきた料理は脳みそではなく、ボーイさんの説明では当地特産のチーズ、サンマルスランを素材にとろりと加工したという特製の料理だった。では〈Cervelle〉はどうなったの? その謎は翌日「絹織物博物館」を訪ねたことで半分は解けた。実はそこの正式名称は〈La Maison des Canuts〉「カニユの家」と言う。カニユとは大昔からリヨンの繁栄を支えてきた絹織物職人のことだったのである。でもチーズ料理の名に「織物職人の脳みそ」とはなぜか? 二説が出てきた。A夫人「繊細な絹織物を作り出す職人さんの脳だから、デリケートなお味が……」。B氏「年がら年中、機織りの単純作業ばかりやつてたから、脳みそがとろけてしまうんじゃないの」。いまだにその名のほんとうの由来がわからない。(M.I)

1998年度フランス語入門講座

講師陣に新しく三重大学・平石先生

今年も本会主催のフランス語入門講座が3月2日から津市の第一ビルで始まりました。講師は例年お願いしているJ-F. ダメム先生のほか、新たに三重大学人文学部の平石典子先生が加わり、主として文法面を担当していただいております。受講生は約30人で熱心に受講しています。

平石先生は東京大学大学院・総合文化研究科から昨年春三重大学に赴任。比較文学がご専門で、ヨーロッパの世紀末文学と日本の同時代の文学の比較が研究のテーマだそうです。フランス語はパリ郊外で小学校時代を過ごされたという本場仕込み、若いけれど二児のお母さんです。



尾鷲から通学のオシドリ夫婦も

今年の受講生のなかには、これまでもっとも遠隔の地から通っているご夫婦の生徒がおります。尾鷲市の浜野豊彦さん・牧子さん夫妻で、往復4時間以上もかかるのにこれまで欠席なし。浜野さん夫妻は同市内で「クスクス」というブラスリーを経営、フランス風惣菜料理を得意としていますが、いつかフランスに味修業の旅を夢みており、そのためにも多少は言葉を習っておきたいとのこと。「これまで本のカタカナで勉強してきたフランス語と、先生の本物の発音があまり違うので驚いている。週一回の休業を利用して、なんとか皆出席でがんばります」。



書籍紹介

三重日仏協会へは各方面から定期刊行物や書籍を寄贈いただき、可能なかぎり事務局で保管しております。それらのなかから、一つは最近のものと、もう一つはやや古いものですが、今年が本の内容に関わりの深い年であることから、下記の二冊を紹介します。関心のある方はぜひお読みください。

I. 過去を表す動詞形式 ——英仏比較文法の試み——

研究代表者 杉浦茂夫 (1998年2月刊、123ページ)

フランス語では〈Je suis ici depuis jeudi.〉と現在形でいいのに、英語では〈I have been here since Thursday.〉と現在完了形が必要です。こうした英・仏語の「時制体系を比較・対照し、一方の言語だけを見ていたのでは明らかでない事象を、他言語から光を当てることによって解明しよう」(同書「はじめに」より)という試みの研究発表書です。研究代表者の杉浦氏は津市出身の英文学者で甲南女子大教授。フランス語に関する部分は、TVフランス語講座でおなじみの中井珠子氏が担当しています。

II. 〈L'AFFAIRE〉

JEAN DENIS BREDIN (1983. Julliard)

数年前に本会顧問の小堀巖氏よりいただいた本です。題のL'Affaire (事件) は19世紀末、フランス社会を震撼させた「ドレフュス事件」のこと。ドイツに軍事秘密を売った容疑で逮捕されたユダヤ人のフランス軍将校アルフレッド・ドレフュスの裁判では、当時の反ユダヤ感情もあって圧倒的に被告不利のなか、1894年終身刑が言い渡されましたが、これが軍のでっちあげであると確信した作家エミール・ゾラが1898年1月、新聞に〈J'accuse!〉「余は弾劾する」という主張を発表して世論を喚起し、ゾラは英国亡命を余儀なくされますが、結局ドレフュスの再審、復権への糸口となりました。今年はその百年記念の年です。この機会に事件を詳細に検証した〈L'AFFAIRE〉(500pages)に挑戦してはいかがでしょうか。